

し、この呼び名が地図の上から、また他の民族の言葉から消え去ることを望まない。われらは、他の立派な民族や国の名を呼ぶときと同じように、リトアニアの名を書き、また口にす。そして、他の民族にも同じように、われらの名を尊敬の念をもって呼んでもらいたいのである。

われらの過去の歴史は、われら自身の歴史である。一条の光と真理よ、その悲劇的かつ英雄的、そして血だらけで陰鬱なる歴史のページを、また古くて新しい文化の面影を明るく照らしたまえ。われらが話し、誇りに思う言葉は——われら自身の言葉である。その言葉はだれをも傷つけないし、だれをも貶めない。他の言葉と同じく、それはただ生きのびようとしているのだ。

われらを見つめる人間は真理と正義を求めている。その人の生活、仕事、創造性はしっかりと守らねばならない。

われらが暮らす環境——それはわれらの環境であるが、われら自身がその子どもでもある。さあ、そのよんだ緑色の目を洗い清め、愛と思いやりで環境を取り囲むのだ。<sup>★1</sup>

ソビエト・ウォッチャーやメディアは、あまりに呆気ないソ連邦の崩壊に不意打ちを食らった。ソ連国内では諸民族がいかに繁栄しているかを示すため、その経済発展を示す数字が世界に向けて発表されていた。昨日まで表面的には後進的だった中央アジアの諸地域が大きく発展したことを示すデータや統計が示された。しかしこうした地域はどういうわけか、とくに経済的観点からすれば明らかに有利な連邦制度を拒否したのだった。ソ連体制の支持者は、多民族国家の抱える諸問題を解決したとして、ソ連の業績を高く評価していた。彼らは、今日の世界で少数民族がなぜ独立する必要があるのか、その背後にある論理を理解できなかった。ヨーロッパが統合へのプロセスにあるとき、それはなおさらである。グローバル化のプロセスと単一市場経済こそが唯一の正しい方策だ、と一般的には考えられているからだ。それぞれの民族のアイデンティティや言語を求めるとなど、もはや取り戻すことのできない過去への憧憬であると思なされたのだった。モスクワ中央は、イスラムに帰依した者たちを汎イスラム主義者と見なしたし、こうした便利なレッテルは西側諸国にも容易に受け入れられていった。

本書は、ソ連が半世紀以上にもわたって描いてきたものとは異なる現実の姿を浮き彫りにしていく。本書はまた、中央集権国家が各民族と文化、環境を意図的に破壊してきたことも取り上げる。さらに、社会と人間の尊厳や人間の性的剝奪についても言及する。各民族は文化を踏みにじられながらも自由を模索したのだが、その結果は多くの者にとって悪夢となった。こうした試練はツァーリ時代に始まった。諸民族の土地が植民地化されはじめると、東洋蔑視オリエンタリズム（本書でいう東洋とはカフカスや中央アジアを指す。日本や中国をはじめとする東アジアは含まれない）の態度が現れ、征服された諸民族への差別を招いたのである。東洋蔑視者の言説は、植民地を支配する体制レジームが、その人種、文化、歴史も含めて優っているということを主張するものだった。併合された地域ではロシア政府の搾取的政策が正当化され、同時にロシアの行政府、それに研究書や文芸作品も、東洋がいかに悪辣かといったステレオタイプすなわち紋切型の通念を広めていったのである。そして実際は侵略者である植民者が、野蛮人や未開人の植民地に向けて派遣されていたのだった。ロシアは言語と文化のルーツの多くを東方や南方の隣人に負っていたにもかかわらず、ヨーロッパの思想や諸概念を取り入れたために、皮肉にもそのルーツを拒否したのである。

\* \* \*

ビョートル・チャアダーエフ（一七九四—一八五六。ロシアの思想家。主著に『哲学書簡』『狂人の弁明』）は一八二九年、ニコライ一世（一七九六—一八五五。デカブリストの乱を鎮圧し、反動政治を強化した）時代のロシアについて次のようにコメントしている。

われわれは特別の民族といえるかもしれない。たしかにわれわれは人類の中では目立たない一民族にすぎないが、しかし何か偉大な教訓を世界に与えるために、そしてそのためにのみ存在しているのである。<sup>★2</sup>

チャアダーエフの発言は、一五〇年以上を経たエリツィン時代のロシアで共感を呼んでいる。そこでは、ブーメ